

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-131	A-151	13-113 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Light drinking versus abstinence in pregnancy - behavioural and cognitive outcomes in 7-year-old children: a longitudinal cohort study. 母親妊娠期中の軽度飲酒と非飲酒の比較－7歳児の行動認知に関する長期コホート研究		
執筆者		
Kelly Y, Iacovou M, Quigley MA, Gray R, Wolke D, Kelly J, Sacker A.		
掲載誌		
BJOG. 2013 Oct;120(11):1340-7. doi: 10.1111/1471-0528.12246.		
キーワード		PMID
軽度飲酒 非飲酒 妊娠期 小児中期 行動認知		23590126
要 旨		
目的： 母親妊娠期中の軽度飲酒が子供の小児中期の認知・行動に関する障害や疾患との関連を検証する。		
方法： 英国での集団コホート研究により 10,534 名の 7 歳児を対象とした。非飲酒者と軽度飲酒者の母親から生まれた子供を対象者として、PSM (propensity score matching)法による準実験的手法によって調査を実施した。親や担当教員が点数化した行動癖に関する調査、認知を点数化した読解力した調査、数学力の調査、空間認識力に関する調査を行った。		
結果： OLS(Ordinary least squares)回帰分析と PSM 分析を行った。行動障害に対して調整前のパーセンテージ標準偏差のスコアは 2%～14%であった。交絡因子調整後の結果では、差が弱められ、担当教員のつけた点数以外で統計的有意差を失った。男子において、親のつけた点数は調整前は-11.5、OLS 実施後-4.3、PSM 実施後-6.8 であり、担当教員のつけた点数は調整前-13.9、OLS 実施後-9.6、PSM 実施後-10.8 だった。女子において、親のつけた点数は調整前-9.6、OLS 実施後-2.9、PSM 実施後-4.5、担当教員のつけた点数は調整前-2.4、OLS 実施後 4.9、PSM 実施後 3.9 であった。認知テストの点数では調整前の差は読解力、数学、空間認識に関する試験では標準偏差の 12%から 21%の間であった。交絡因子調整後では差は減少したが、男子において読解力、空間認識において統計的有意差を維持していることが確認できた。男子において読解力は調整前 20.9、OLS 実施後 8.3、PSM 実施後 7.3 であり、数学力は調整前 14.7、OLS 実施後 5.0、PSM 実施後 6.5 であり、空間認識は調整前 16.2、OLS 実施後 7.6、PSM 実施後 8.1 であった。女子において読解力は調整前 11.6、OLS 実施後-0.3、PSM 実施後-0.5 であり、数学力は調整前 12.9、OLS 実施後 4.3、PSM 実施後 3.9 であり、空間認識は調整前 16.2、OLS 実施後 7.7、PSM 実施後 6.4 であった		
結論： 母親の妊娠期中の軽度飲酒は子供の小児中期の発達に関連しないことが示唆された。本知見は現行の英国の妊娠期中の飲酒に関する健康指針を支持する内容である。		